

## 6 方頭大刀の解釈を巡って

豊島氏は方頭大刀についての最新の研究をしており、その中で蝦夷穴12号横穴墓から出土した大刀にも言及しています。それによると、12号横穴墓と同じグループの方頭大刀の生産には国家が直接関与したとされています。そして、方頭大刀が出土した遺跡は関東地方北部では終末期の群集墳、東北地方南部では横穴墓が多いことから、被葬者は国家の支配体制に組み込まれつつあった在地首長層に位置づけています。さらにその背景として、白村江の敗戦により西国の軍事力は疲弊しており、天皇家が軍事的基盤を東国に求めたことに原因があるとしています(豊島2014)。

当時の朝廷は、東日本の在地首長層を国家の軍事組織に編成する政策を定めます。そして、方頭大刀は官営工房で生産され東日本を中心とする首長層・有力者に配布された、国家による武器生産と管理を象徴する重要な大刀という指摘がなされています。蝦夷穴横穴の方頭大刀は、そうした古代史の歴史的背景の中でとらえることが可能な遺物なのかも知れません。

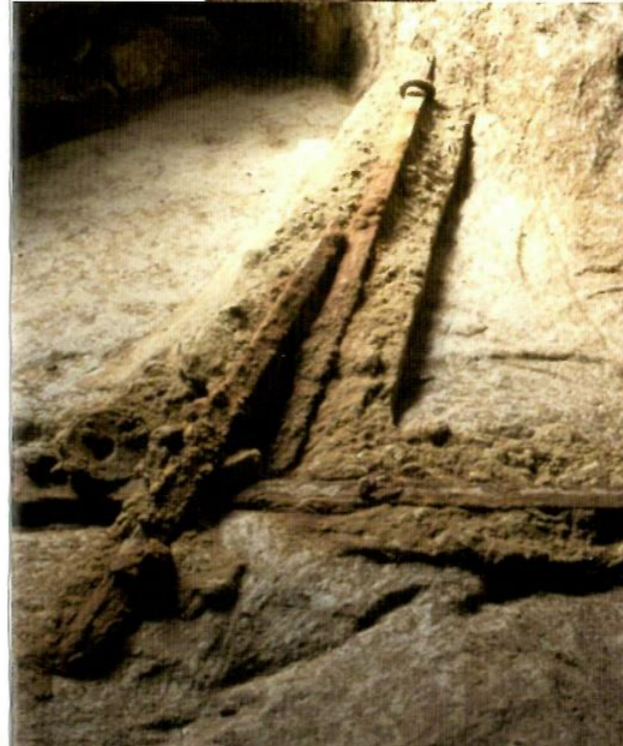
【引用・参考文献】(紙幅の関係上、報告書については割愛させていただきました。)

- 穴沢味光・馬目順一 1977「頭椎大刀試論—福島県下出土例を中心にして〈付・頭椎大刀出土地目録〉」『福島考古』第18号  
内山敏行 1992「古墳時代後期の朝鮮半島系冑」『研究紀要』第1号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
内山敏行 2001「古墳時代後期の朝鮮半島系冑(2)」『研究紀要』第9号 とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター  
内山敏行 2006「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第7号 古代武器研究会  
金奎正・梁英珠・金祥奎・丁在永 2012「南原月山里古墳群—M4・M5・M6 號墳—」全北文化財研究院  
草野潤平 2019「東北地方における大型終末期群集墳の成立」『古墳分布北縁地域における地域間交流解明のための実証的研究』福島大学行政政策学類  
菊地芳朗 2010「第1部 刀剣類からみた古墳時代史の展開」『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会  
佐久間正明 2002「郡山市蝦夷穴横穴墓群発掘調査の概要」『第44回福島県考古学会大会 研究発表要旨』  
佐久間正明 2003「福島県における古墳と横穴」『横穴墓と古墳』第15回東北・関東前方後円墳研究会大会  
白石太一郎 1973「大型古墳と群集墳」『考古学論攷』第2冊 奈良県立橿原考古学研究所  
豊島直博 2001「古墳時代後期における直刀の生産と流通」『考古学研究』第48巻第2号 考古学研究会  
豊島直博 2014「方頭大刀の生産と古代国家」『考古学雑誌』第98巻第3号 日本考古学会  
豊島直博 2019「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第102巻第1号 日本考古学会  
福島雅儀 1986「阿武隈川上流域の切石積横穴式石室」『考古学雑誌』第72巻第2号 日本考古学会  
横須賀倫達 2009a「淵の上1・2号墳出土遺物の調査と研究」『福島県立博物館紀要』第23号  
横須賀倫達 2009b「後期型鉄冑の系統と系譜」『考古学ジャーナル』581 ニューサイエンス社  
柳沼賢治 2003「石城・石背」『季刊考古学(特集:終末期古墳とその時代)』第82号 雄山閣  
若狭 徹 2019「東国首長の地域経営と装飾付大刀の意義」『刀剣が語る古代国家誕生』古代歴史文化協議会

### 例言

1. 本書は、大安場史跡公園企画展のパンフレットです。
2. 本展は下記の通り開催します。  
会期:2020年7月11日~8月30日 会場:大安場史跡公園ガイダンス施設  
主催:郡山市 郡山市教育委員会 大安場史跡公園(公益財団法人郡山市文化・学び振興公社)
3. 展示資料は全て郡山市の所蔵です。
4. P2~4の写真は、担当者が現地及び現場説明会の際に撮影したものです。
5. 企画展の実施と本書の作成は佐久間正明と渡邊歩が担当しました。

編集・発行 大安場史跡公園(公益財団法人 郡山市文化・学び振興公社)  
〒963-1161 福島県郡山市田村町大善寺字大安場160番地  
発行日 2020年7月10日



大安場史跡公園

令和2年度 第1回企画展

# 群集墳の時代

—7世紀の郡山—

# I 群集墳の時代

## 1 変革の時代

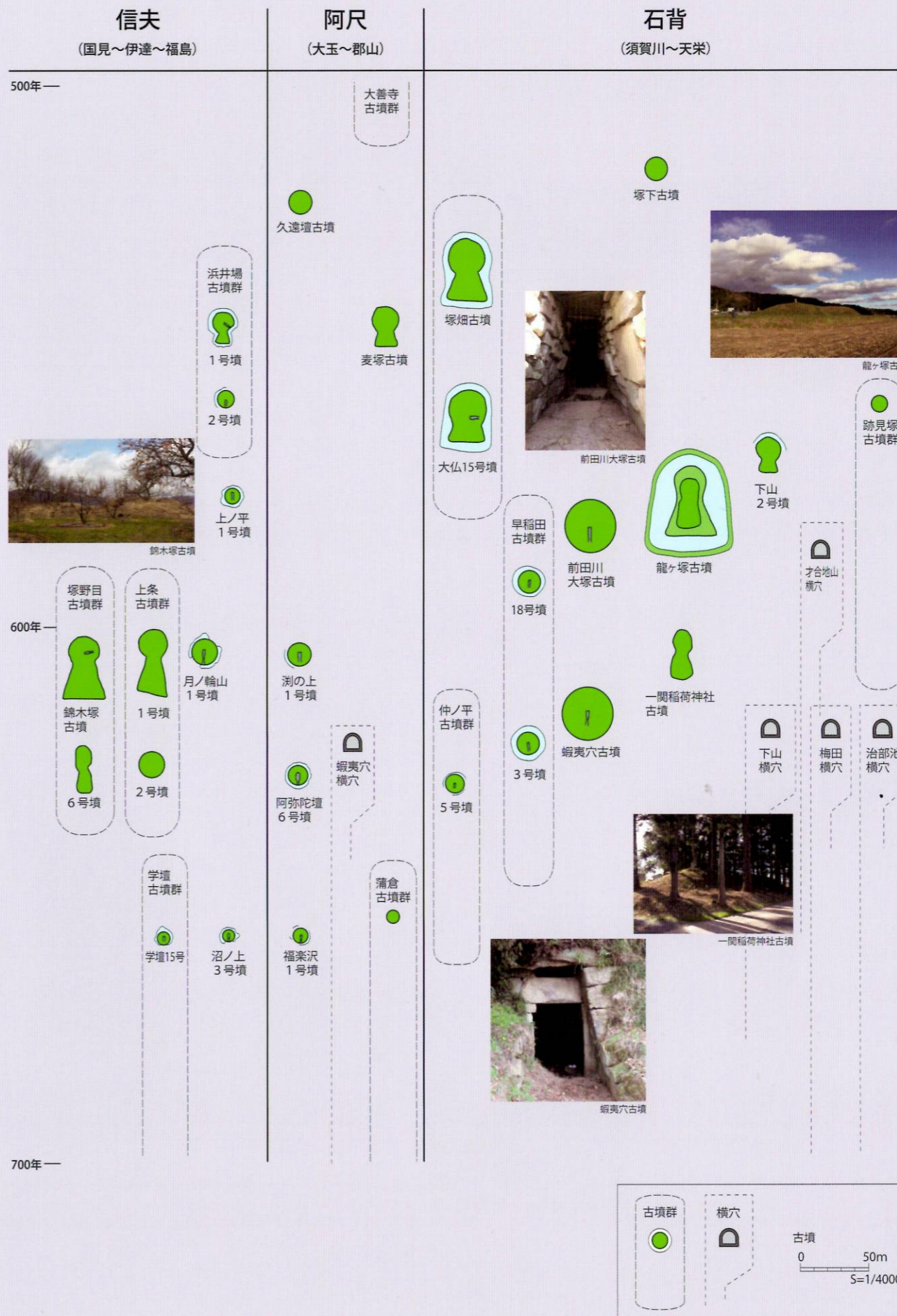
7世紀は、古代国家の基礎が築かれた時代です。中央では、聖徳太子や蘇我氏、天智天皇や天武天皇等が活躍しました。中大兄皇子・中臣鎌足らが蘇我入鹿を殺害した645年の乙巳の変とそれに伴う大化の改新、倭国と百済の連合軍が唐・新羅の連合軍に大敗した663年の白村江の戦い、そして大海人皇子が大友皇子を破った壬申の乱など、政治的な変動が続いた時代です。このような変化と同一歩調をとるように、3世紀半ばから約400年も続いた古墳の造営が、終息へと向かいます。

こうした中央の変革は、畿内から遠く離れた郡山市にとって一見すると無縁とも考えられます。しかし、洲の上1号墳からは朝鮮半島に起源をもつ冑が出土し、その類例等から群馬県の首長との関係性が読み取れます。また、この時期に出現する装飾付大刀のあり方は中央氏族の動向を表すものと考えられ、頭椎大刀は物部氏と、単龍鳳環頭大刀は大伴氏、双龍環頭大刀は蘇我氏がそれぞれ生産に関与し、さらに方頭大刀は国家による武器生産を象徴するものという説があります。洲の上1号墳からは頭椎大刀が、蝦夷穴横穴墓群からは方頭大刀が出土しており、こうした遺物のあり方から中央との関係性を考えることが可能となります。

## 2 群集する古墳群

前方後円墳の築造終了を、古墳時代の終わりと評価する考え方があります。しかし、前方後円墳が築造されなくなっても、円墳や方墳などの古墳は各地で造られ続けます。そこで、そのような時期を古墳時代に含める考え方もあります。年代は概ね7世紀で、古墳時代終末期と呼ばれています。古墳の築造数は以前と比べ多くなりますが、規模は小さく径10m前後の円墳が大半です。こうした小規模な古墳が密集して築かれたものを「群集墳」と呼んでいます。群集墳発生メカニズムについて白石太一郎氏は、生産力の発展に伴い台頭してきた各地の中小共同体の首長層や有力成員層を、政権が支配秩序へ組み込むことを目的にしたものであったとしました(白石1973)。

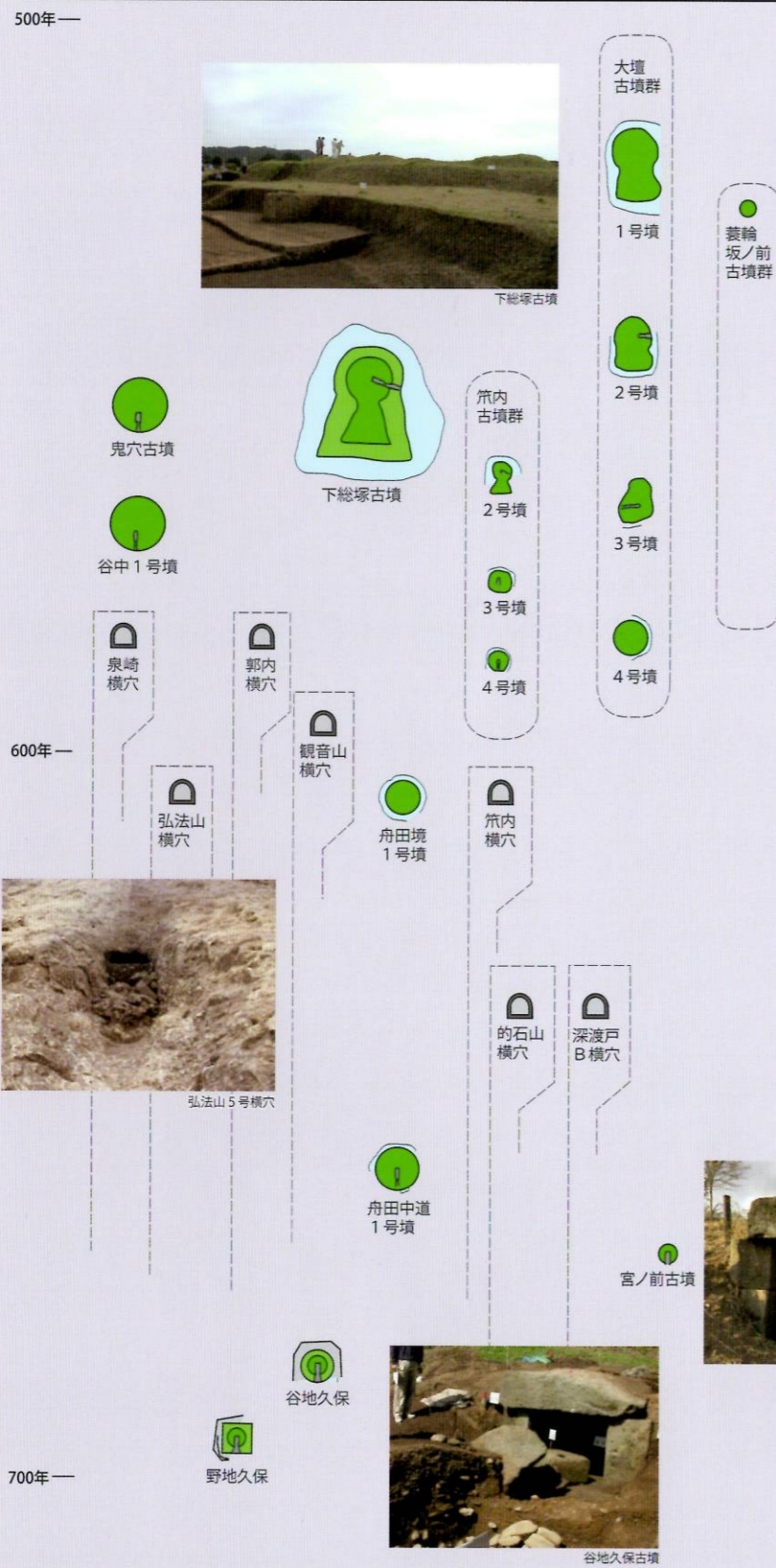
では先ず、地域を束ねる有力者の古墳を概観します。福島県では、6世紀末から7世紀初頭を最後に、前方後円墳が築造されなくなります。その後には造られた有力古墳は、群集墳の円墳よりは一回り大きい径20m程度の円墳のようです。中通り地方で見つかった同様の古墳として、白河市の舟田中道1号墳、須賀川市の蝦夷穴古墳、福島市の月ノ輪山1号墳などがあります。これらの古墳のうち、蝦夷穴古墳は傑出した規模を持ち、墳丘は30mを超えます。円墳とされることが多いのですが、形状が大きく変更されているため定かではなく、方墳の可能性もあります。



各地の後期・終末期古墳(1)

白河

(泉崎~矢吹~中島) (白河) (石川~棚倉~浅川)



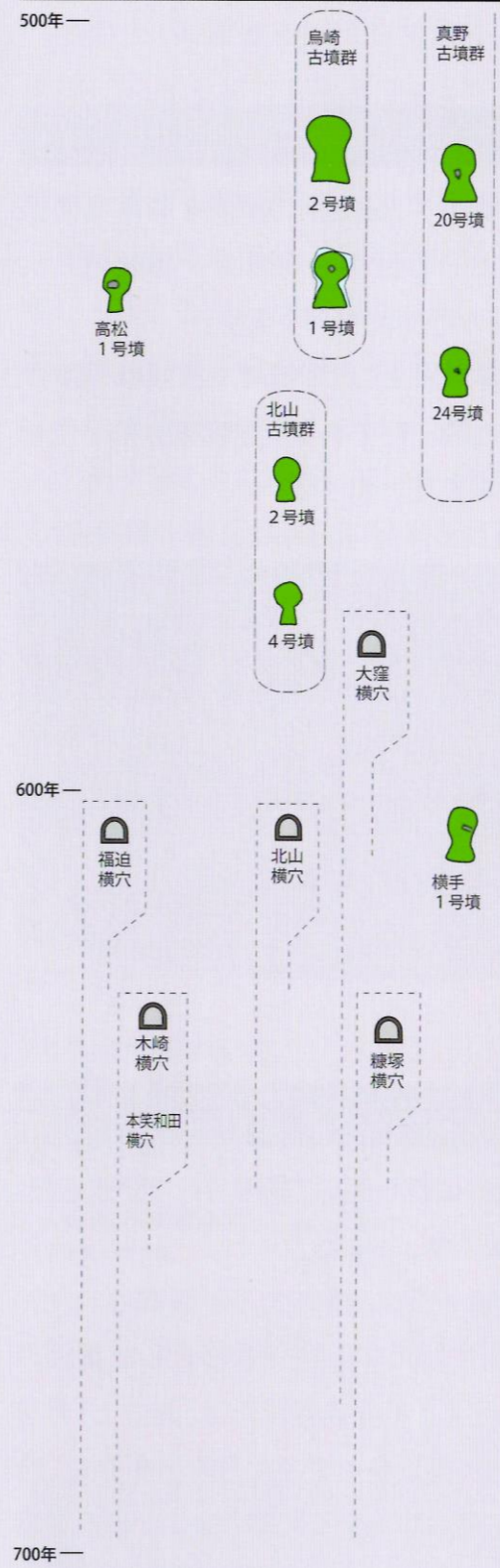
会津

(会津若松~喜多方~会津坂下)



浮田

(新地~相馬) (南相馬)



染羽

(浪江~双葉~楢葉)



石城

(いわき市北部)



菊多

(いわき市南部)



各地の後期・終末期古墳(2)

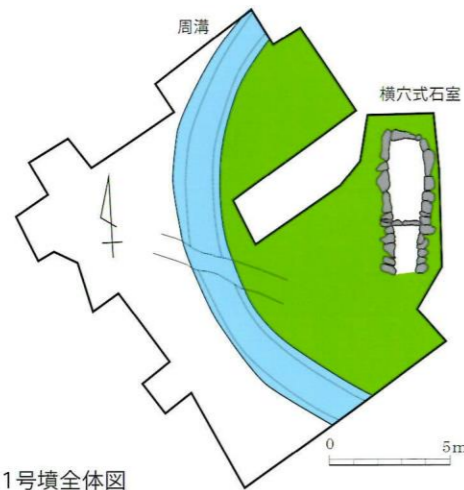
各地の後期・終末期古墳(3)

## II 地域の有力墳 一測の上1号墳一

### 1 7世紀の有力古墳

郡山市笹川二丁目の測の上1号墳は、この地域の有力古墳です。幅2mの周溝を有する直径20mほどの円墳と考えられています。しかし、横穴式石室とその西側の周溝が一部調査されたのみで全容は不明です。東側に前方部がある前方後円墳の可能性もあります。

測の上1号墳の横穴式石室からは装飾付大刀と鉄製の冑が出土しています。古墳は何度か盗掘にあっていて、特に冑は散乱した状態で出土しました。いずれも6世紀末から7世紀初頭の重要な遺物で、多くの研究者により調査研究が続けられています。



測の上1号墳全体図



横穴式石室

### 2 頭椎大刀

装飾付大刀は頭椎大刀と呼ばれるものです。把頭は、意識的に取り外して副葬されていました。茎には銀線が巻かれ、鐔は倒卵型で六つの窓がある金銅製です。

日本列島及び朝鮮半島の大刀を研究する穴沢味光・馬目順一氏は、頭椎大刀が副葬された測の上1号墳などの被葬者を「地元から出現した新興の小首長や新たに中央から移住した集団の長」と考えました(穴沢・馬目1977)。また古墳時代の鉄刀を研究する豊島直博氏は、測の上1号墳の大刀が6世紀第IV四半期に位置付けられるとします。そして同じタイプの大刀の分布から、奈良盆地—伊勢湾沿岸—内房—北関東—福島県中通り—仙台湾沿岸という経路が辿れ、畿内の有力豪族である物部氏が生産し、地方の物部氏に与えられたと考察しています(豊島2019)。



1号墳出土頭椎大刀

### 3 豎矧板(縦長板)革綴突起付冑

測の上1号墳から出土した冑は、湾曲した縦長の鉄板を繋ぎ合わせ冑の本体部分を作り、頂部に突起を付けています。それぞれの鉄板は革紐で綴じられています。そのため「豎矧板(縦長板)革綴突起付冑」と呼ばれます。さらに、小札と呼ばれる小さな鉄板で鍔と呼ばれる首を保護する付属具が付けられています。

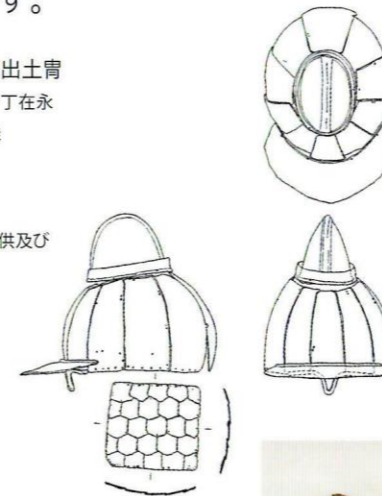
冑は、発見当時どのような形であったのか不明でした。その後、古墳時代の鉄製品研究をリードする二人の研究者により、冑の構造と重要性が明らかにされてきました。先ず内山敏行氏により冑の全体像が復元され、朝鮮半島の冠帽付冑が変化した「朝鮮半島系冑」であることが指摘されました。さらに特異な付属具である「胸板状鉄製品」も朝鮮半島系冑などと共に出土することに言及しています(内山1992・2001・2006)。

横須賀倫達氏はさらに研究を進ませ、やはり外来系の冑であることを述べています。そして、国内での類例として、冑の基本構造が同じく、さらに胸板状鉄製品が出土している群馬県綿貫観音山古墳出土資料をあげ、両者の関係が深いことを明らかにしました(横須賀2009a・b)。

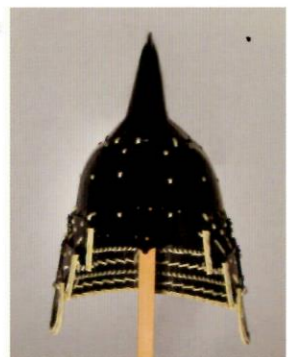
なお綿貫観音山古墳出土品(国重要文化財)は、古代の東日本を代表する遺物で、国宝になることが決定しています。群馬県立歴史博物館ではその歴史的価値を紹介する企画展「綿貫観音山古墳のすべて」が開催予定(2020年7月18日～9月6日)で、測の上1号墳の資料も同展で展示される予定です。



南原月山里M5号墳出土冑  
金堂正・梁英珠・金祥奎・丁在永  
2012『南原月山里古墳群  
—M4・M5・M6 號墳—』  
全北文化財研究院  
(内山敏行氏より情報提供及び  
文献提供を受ける)



胸当状鉄製品



復元した冑(横須賀倫達氏製作)

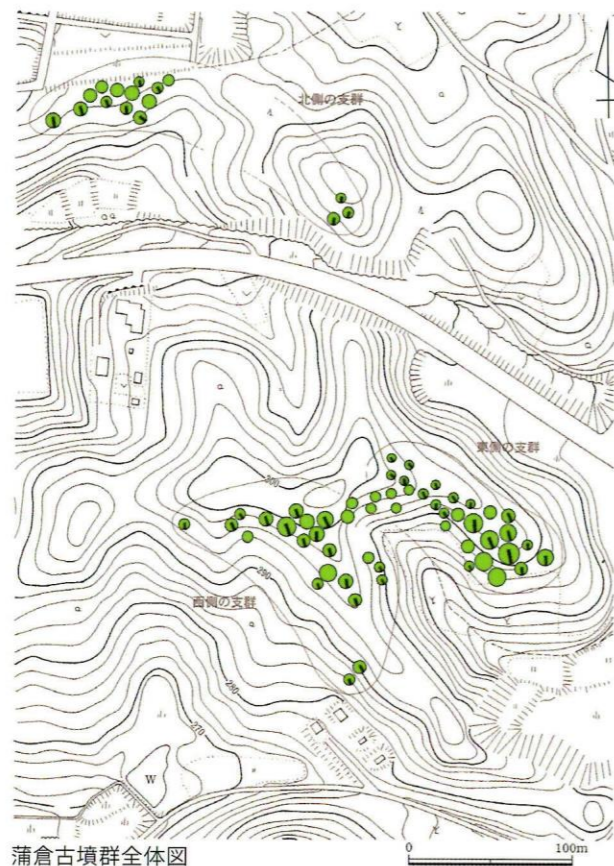


1号墳出土冑

# Ⅲ 密集する小円墳 —蒲倉古墳群—

## 1 東北地方有数の群集墳

郡山市立美術館の東側と北側、蒲倉町・横川町・安原町にまたがる丘陵上には、7世紀に造営されたとみられる蒲倉古墳群があります。これまでに71基の円墳が確認されており、東北地方有数の規模を誇ります。墳丘は裾を接するように密集しますが、まばらな場所もあり、いくつかのグループに分かれるようです。規模は径11mの5号墳が最大で、ほとんどは径10m以下です。横穴式石室からは鉄製の武器や工具といった副葬品が、周溝からは儀礼に使われたとみられる土師器・須恵器が出土しました。土師器や須恵器の年代は、古墳が造られたと考えられる時期よりも新しいものが多いことから、最初の埋葬からしばらく時間が経過した後に別の人物を埋葬する「追葬」が行われたと考えられます。



14号墳出土鉄鏃・火打金



20号墳出土刀子



48号墳出土鉄鏃

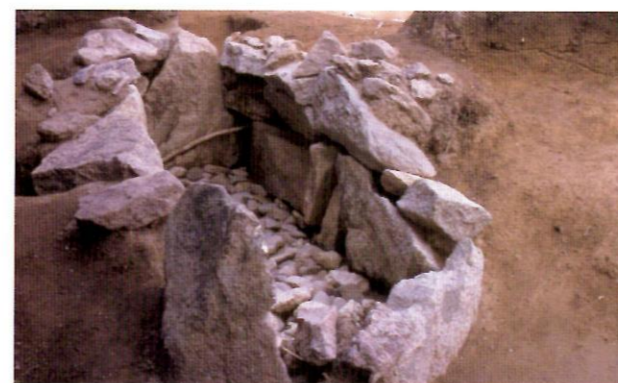


48号墳出土土師器・須恵器

## 2 横穴式石室の形態変化

横穴式石室は、遺体を埋葬する玄室とそこへ至る羨道に分かれ、両者を区切る玄門があります。草野潤平氏は、東北地方の終末期の大規模な群集墳は、畿内政権による東北経営の一翼を担う集団の墓域としています。さらに蒲倉古墳群について、玄門と石室を区切る玄門立柱石や石積み的手法など、石室構造がどのように変化するか検討をしています。その結果、横穴式石室の構築開始は7世紀前半ないし初頭と考えられますが、造墓数が大きく増えるのは、7世紀中葉以降としました。当初は石室の構造に様々な形が見られ、複数の集団が古墳を営んだとしています。そして、7世紀中葉以降に石室が同じ形態にまとまることから、複雑化した集団関係をまとめあげる畿内政権の働きかけがあったのではないかと考えています(草野2019)。

蒲倉古墳群は、畿内政権による東北経営の一端が垣間見られるという理解にとどまらず、石室構造の変化から葬られた集団の動向を推測できる、重要な古墳群と言えるかも知れません。



36号墳(小規模な無袖形石室)



5号墳(立柱石が側壁から独立する)



4号墳(立柱石がなく側壁基底石を立てる)



40号墳(平積みだが基底石に大型石材を用いる)



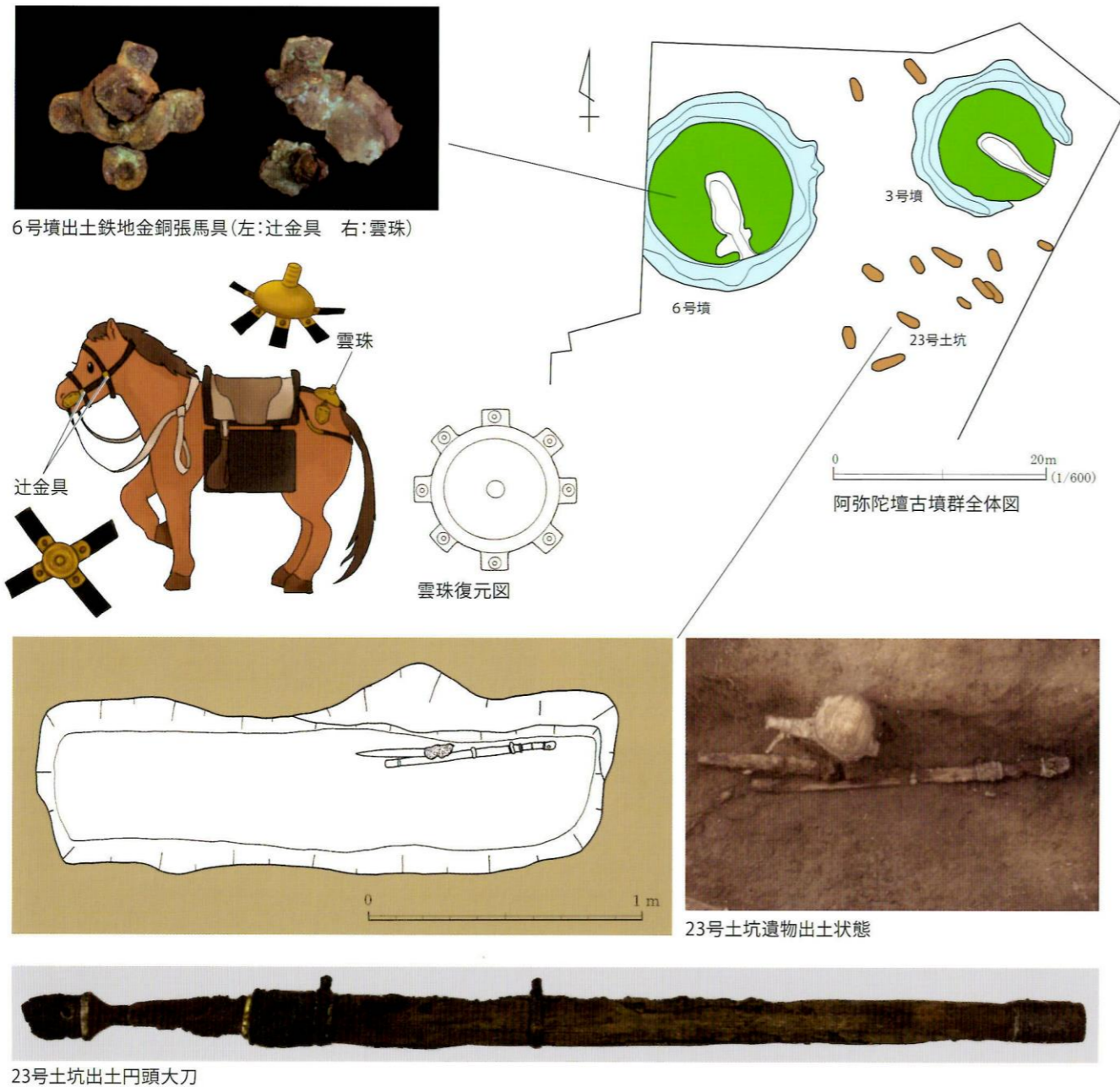
46号墳(側壁が全て平積み)



14号墳(立柱石を欠く)

## IV 古墳群の階層性 —阿弥陀壇古墳群—

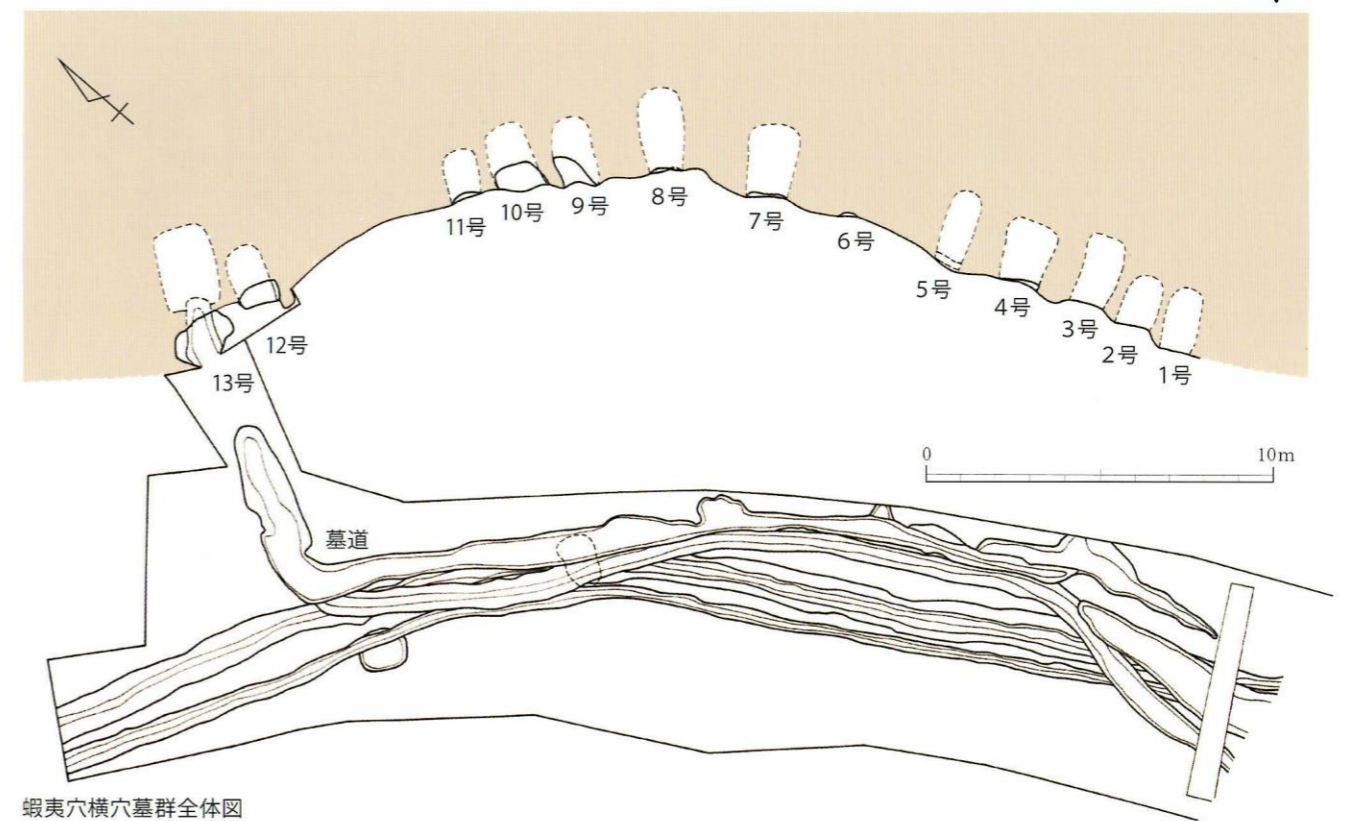
蒲倉古墳群のような大規模な群集墳は特殊な理由で出現したと考えられ、比較的多いのは径10m前後の円墳が5～15基程度集まった古墳群のようです。大槻町の阿弥陀壇古墳群・蝦夷壇古墳群(福楽沢遺跡)、田村町の妻見塚古墳群などが該当します。このうち、阿弥陀壇古墳群では、鉄地金銅張(鉄の地板に金メッキを施す)の馬具や、鏃・小刀などの鉄製の武器、耳飾りや玉類が、横穴式石室から出土しました。同古墳群では、古墳と同じ時期の土坑墓も見つかりました。土坑墓は、遺体を埋めるための穴を掘っただけの簡易な形状で、古墳に葬られた人物より低い階層の人の墳墓と考えられます。その1つである23号土坑では、装飾の付いた大刀が副葬されていました。



## V 横穴墓 —蝦夷穴横穴墓群—

### 1 新発見の横穴墓

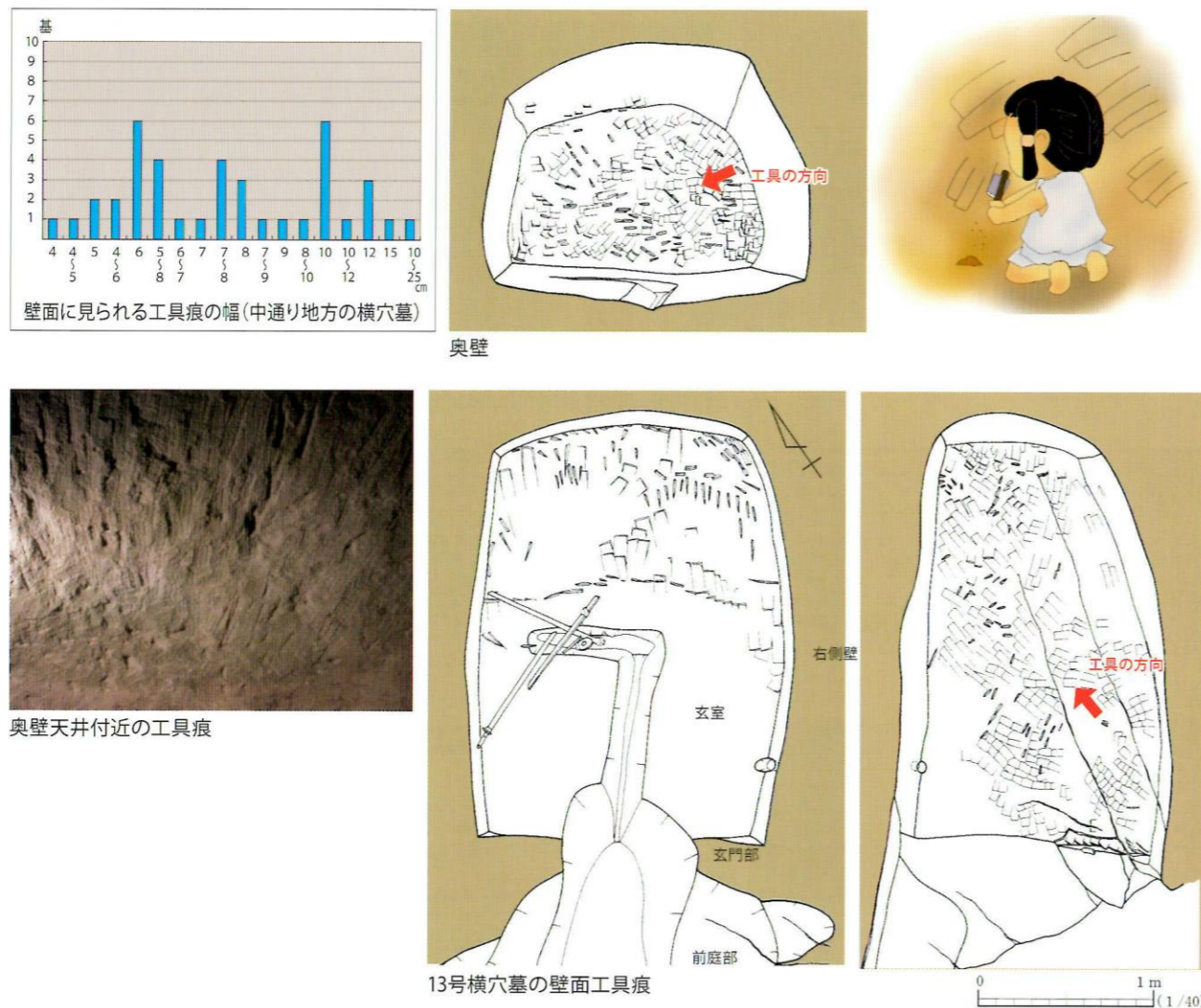
遺体埋葬用の部屋を、凝灰岩などが露出した岩盤に掘り込んで造る墳墓を横穴墓と呼びます。横穴墓は数多く集まって群を形成するので、墳丘を持つ古墳群と形こそ異なりますが、群集墳の一形態と考えることが可能です。福島県内でこれまでに確認されている横穴墓は303遺跡を数えますが、その分布には偏りがあり、中通り地方の南部と浜通り地方に偏在します。郡山市は横穴墓が少なく、確認されているのは、田村町の蝦夷穴横穴墓群と下田横穴墓群等があるに過ぎません。蝦夷穴横穴墓群は、古くから開口していた11基の横穴墓が知られていました。平成13年の調査の結果、横穴墓が掘られた崖面の前面で、墓道や区画と考えられる溝跡が確認されました。また、新たに発見された12号・13号横穴墓からは、大刀や鉄鏃といった武器、装身具であるガラス製の玉類などが出土しています。そして、横穴墓を築く際の様子や閉塞をする方法も解明され、大きな成果を得ました。



## 2 横穴墓の構築方法～工具痕跡

横穴墓には、遺体を埋葬するための「玄室」と呼ばれる部屋があり、開口部の外側には「前庭部」と呼ばれる空間もありました。そして、玄室と前庭部との間には「玄門部」と呼ばれる仕切りがあります。また、玄室の床面には排水溝が設けられることもありました。

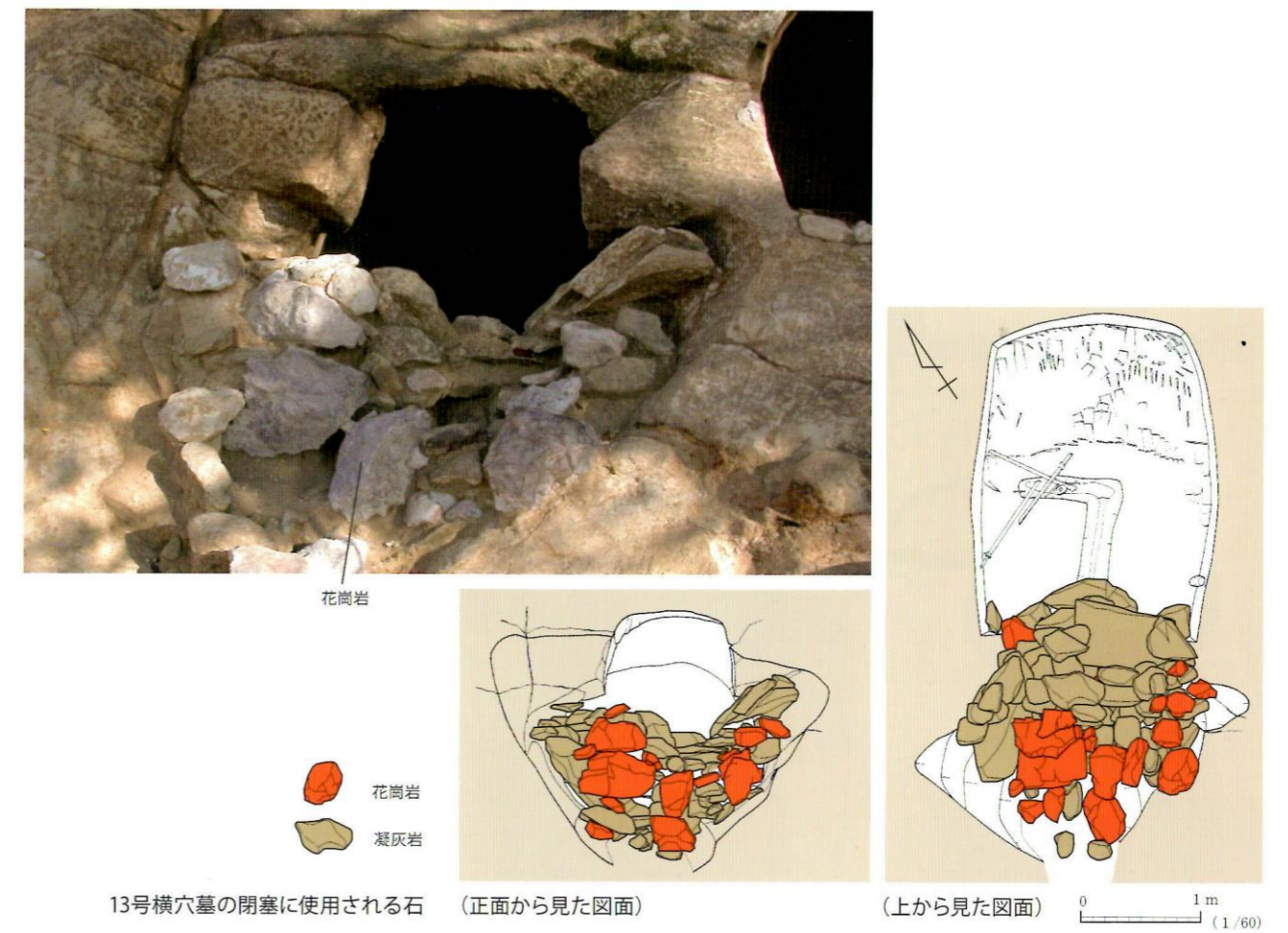
12・13号横穴墓とも、玄室の両側壁や天井・床面では、岩盤を削った際の工具の痕跡が明瞭に確認できました。工具痕の幅は2種類見られ、幅4～6cmが大多数を占め、わずかに7～9cmのものも見られます。中通りの横穴墓で観察された工具痕をみると、6～7cm前後の幅の工具が最も多いことが分かります。ところで、両横穴の工具痕は基本的に左下がりの単位で共通しており、右上から左下へ削られたことが分かります。手斧のような工具が使われたと考えられます。工具痕は、いずれも刃先を岩盤に押し当てて引き削ったような痕跡で、表面を平滑に仕上げる、構築過程の最終段階の仕上げの痕跡と思われます。



## 3 横穴墓の構築方法～閉塞方法

横穴墓は、遺体の埋葬を終えると、入り口は石や板で塞がれます。入り口を塞ぐ方法にはいくつかの方法があります。福島県内でこれまでに確認されている横穴墓の中で調査時に閉塞施設が残り、それについての調査記録のある横穴墓は300基にのぼります。中通り・浜通り地方の横穴墓の閉塞方法をみるといくつかの異なる方法があることが分かります。最も多いのは凝灰岩などの基盤岩、あるいは河原石を単純に積み上げ、入り口を塞ぐものです。また、入り口と同じ形状に加工した基盤岩の切り石を入り口にはめ込み、凝灰岩や河原石などで外側から押さえるものも見られます。

蝦夷穴13号横穴墓の閉塞方法を見てみます。上部には崩落したと考えられる大きな凝灰岩が見られ、内側・玄室側には人頭大の凝灰岩が積み上げられています。これに対し、最も外側には基盤岩とは異なる花崗岩が積み上げていました。このように二種類の石が用いられていることが分かります。外側から見える位置に重く大きな花崗岩を積んでいることから、盗掘されないことを目的としたものかも知れません。



石の種類	基盤岩	基盤岩切石	基盤岩切石 +基盤岩の押さえ	基盤岩切石 +河原石押さえ	河原石	礫	二種類の石
横穴墓数	64	19	10	12	113	30	10

横穴墓の閉塞石使用石材(中通り・浜通り地方の横穴)

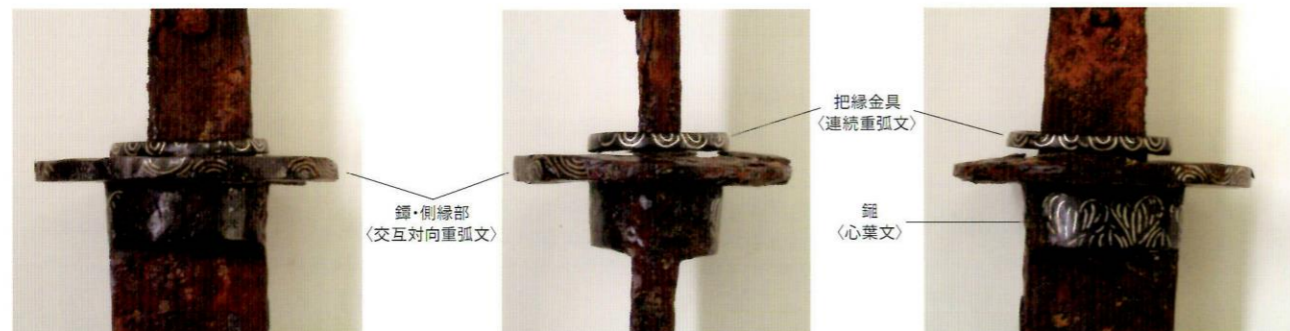
#### 4 13号横穴墓の象嵌が施された大刀

13号横穴墓では、3振りの鉄製の大刀が玄室左側壁近くで折り重なって出土しています。本来は、壁面に立てかけられていたのかも知れません。3振りの大刀のうち1振からは、象嵌が確認されました。象嵌は鐔の両面と側面、そして銚・把縁金具にも見られます。幅0.5mm程度の細線でハート形の心葉文を描き、その内部に細線を充填するデザインです。心葉文と心葉文の間には葉脈状の文様が施されています。銚部分も同様のデザインです。鐔の側面には半円状に重なる文様が向きを変えて隣り合う交互対向重弧文、把縁金具には、半円状の文様が連続する連続重弧文という文様が描かれています。

福島県内で出土した象嵌大刀は20数例知られていますが、本例は鐔・銚・把縁金具の3つに象嵌が確認され、県内有数の資料と言えます。なお、鐔に心葉文が表現されているものは全国で十数例あるとされています。



13号横穴墓大刀出土状況



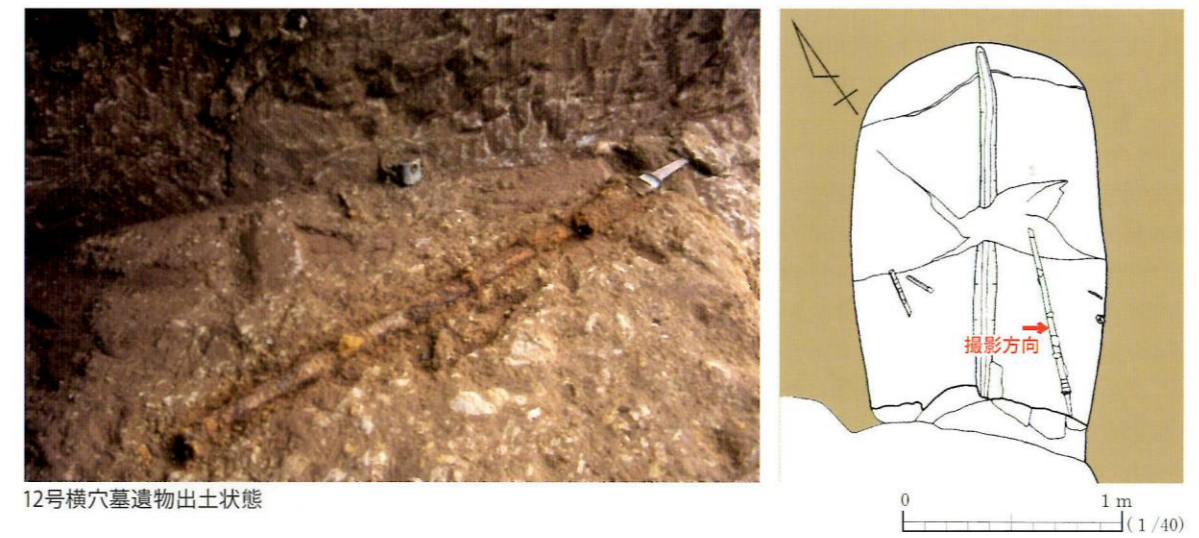
13号横穴墓出土大刀

#### 5 12号横穴墓の方頭大刀

古墳時代後期から終末期の大刀は、握る部分の先端・把頭の装飾の形から、いくつかのグループに分けることができ、総称して装飾付大刀と呼ばれます。装飾付大刀のあり方は中央氏族・有力エリート層の動向を表すものと考えられ、頭椎大刀は物部氏、単龍鳳環頭大刀は大伴氏、双龍環頭大刀は蘇我氏がそれぞれ生産に関与したとする説が出されています。古墳時代の刀剣類を総合的に検討する菊地芳朗氏もまた、「各有力エリートが装飾付大刀の生産と配布に深く関わっていた」可能性を指摘します。さらに装飾付大刀が「倭政権の政策をになう重要な器物としての役割をはたしたものは、6世紀後葉から7世紀前葉」の時期であるとしています。

12号横穴墓からは、方頭大刀1振・鉄鏃1本などが出土しています。方頭大刀の刀身は排水溝と右側壁のほぼ中間に置かれていましたが、方頭の把頭は、刀身とは約20cm離れた場所に倒立の状態に置かれていました。把頭を外して副葬されたようです。把頭は、高さ4cmで側面がやや内側に湾曲する分銅形をしています。鳩目金具は外径1.8cmで両側に見られます。全体的に緑青で覆われていますが、微量ながら黒色の漆膜が付着していることが観察できます。鐔は喰出鐔と呼ばれるものです。

蝦夷穴12号横穴墓の方頭大刀と同じ特徴をもつ大刀は、東北地方では宮城県の矢本49号横穴や亀井田16号横穴などから出土しています。



12号横穴墓遺物出土状態



12号横穴墓出土方頭大刀

